

## 武蔵野日曜聖書講筈 降誕節祈禱会

## 世の光

——ルカ伝第2章10～14節、イザヤ書第60章1～19節——

1973年12月23日

小池辰雄

キリストのない世界は闇 キリストの前に降参 わが光 キリストという光 内から発しているか 信入・貫入・祈入・突入 阿房宮賦 日本の闇 一粒の麦死なば キリストの中に祈り入る

## 【ルカ2・10～14】

10 御使かれらに言う『懼るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歓喜の音信を我なんじらに告ぐ、11 今日ダビデの町にて汝らの為に救主うまれ給えり、これ主キリストなり。12 なんじら布にて包まれ、馬槽に臥しおる嬰兒を見ん、はその徴なり』13 忽ちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う、14 『いと高き所には栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人にあれ』

## 【イザヤ60・1～19】

1 起きよ、光を發て、なんじの光きたり、エホバの栄光なんじのうえに照出たればなり。2 視よ、くらきは地をおおい闇はもろもろの民をおおわん。されどなんじのうえにはキリスト照り出たまいてその栄光なんじのうえに顕わるべし。3 もろもろの国はなんじの光にゆき、もろもろの王はてり出るなんじが光輝にゆかん。……

19 昼は日ふたたびなんじの光とならず、月も輝きてなんじを照さず、エホバ永遠になんじの光となり、なんじの神はなんじの栄となり給わん。

## ●キリストのない世界は闇

ヨハネ伝1章の1節から18節を読みましたが、「世」というのは闇を意味する。また、罪を意味する。現世は罪の世である。闇の世である。一見おおいに光のようです。また、文化文明は結構なようです。しかし、これは正直のところ、世界は今、滅びのみちを辿っている。非常な偽りの世界である。ごまかしの世界である。しかしながら、神をごまかすことも、偽ることもできなす。

「光と闇と何の関わりあらんや」



という言葉がパウロの言葉にもあります。しかし、その関わりなきこの世に、特に関わりをもつて現れてきた方がある。この光の方です。即ち、ヨハネははつきりとキリストのことを「光」と言っています。闇は光によらなければどうにもならん。今、この部屋も、もしこの蛍光灯を消せば、まさにこれは闇の世界です。しかし、蛍光灯があるので、闇が完全に放逐されている。現実は今、太陽が沈んでいるから、闇です。けれども、光をもつてこれを照らしている。

キリストのない世界は闇なんです。ところが、今は実にキリストのない世界です。ニーチェが、

「神は死んだ」

と言ったけれども、今の人々には、キリストは死んでいる。クリスチャンにとつても、キリストが死んでいる。主キリストを十字架に付けっぱなしである。甦りの復活のキリストを受けとつてない。そういう現実が今の20世紀である。どう考えてもそうです。相対的な善はあるでしょう。けれども、それは濁っていく、悪に染まっていく善である。

### ●キリストの前に降参

正直、教育にたずさわっていても、ただその世界からでは、いわゆる教えではどうにもならん。もちろん、カントが言ったとおり、

「道徳律は一人もこれを守ることができなくても、厳として在る」

という。これは真理です。それは一人も守れなくても厳として在る。この福音的、聖書的というならば、それは神の律法の世界です。

「律法は聖なるものにして」

という。しかし、この律法を本当に、この靈法を身につけたひとがある。そして、守れないものをして私たちに守らしめる。それを支配することのできる世界をつくってください。それがこのキリストである。福音とは、まさに闇の世界を征服した、その世界です。

自分が世の光となつて世を照らし、闇を征服し光の世界にし、罪を征服して、義の世界にし愛の世界にし、死を征服して生命の世界にする。まあ驚くべき人物が現れたわけです。このキリストの前に降参しなくて、なにが信者であるか、なにが聖書であるか、ということとです。

私の秘訣は、いつもキリストの前にぶつつぶれることなんです。なぜ私に力がくるかという、このぶつつぶれから力がくるんです。自分がぶつつぶれないかぎり、絶対に力はこない。

教師ぶつてみたり、伝道者ぶつてみたり、学者ぶつてみたら、もう全然ダメです。

「何ものでもなご」

という、これが言葉ではなくて、本当に私のはらわたの底からこれを受けとるときに、私



は絶対不敗なんです。これは本当に不思議なことですよ。皆さん一人ひとりがまさにその現実にお入りになる。私自身が驚嘆しながら進んでいる。聞くも語るも同じこと、いつも驚嘆驚倒しながら進んでいく。そういうことになったものだから、まあどうも何ともしようがないというわけです。

### ●わが光

この光。これはもう相対的な明るい暗いのなんていうことではない。イザヤ書60章。

「起きよ、光を<sup>はな</sup>発て、なんじの光きたり、エホバの栄光なんじのうえに<sup>てりいで</sup>照出

たればなり。」(イザヤ60・1)

私はクリスマスにここを読むのは今日が初めてです。

「起きよ、光を<sup>はな</sup>発て」

と。いつでも起きれるわけです。私たちに光があるか。けれども、「汝の光」が来たんです。我々の光が、私の光が、あなた方一人ひとりに「私の光」という光が来たんです、今日。キリストという光が。

これはイエスの誕生の時に不思議な星が現れたというが、不思議な星どころじゃない。キリスト自身が最も不思議な星です。そういう「わが光」が——「汝の光」と聖書に書いてあったら、今度は「わが光」と読めばいい——わが光が来たので、私は光らざるを得ないわけです。私が闇であろうと、ヘッタクレであろうと、なんであろうと、一向に差し支えない。そういうことを思っているから、

「私はまだクリスチャンとしてはダメですから」

なんてね。いわゆる謙遜なんでものはひとつもダメなんです。本当の謙遜は、ぶっ倒れ、ぶつつぶれなければ、本当の謙遜ではない。このダメな野郎だから、光ってくださいつているんです。

「こつち側が少し取り柄があるからやって来た」

なんていうキリストではない。

「お前はしょうがない野郎だな。だから、やって来たぞ」

「それはありがとうございます」

と。その他に何かありますか。本当にもう凶太いといえば、これくらい凶太いはなしはない。これは親鸞が歎異抄ではつきり言っている。「悪人正機」というわけです。

「悪人であるから、本当に本願を受けとれるんだ」

と。そうしたら、親鸞はあのような親鸞になったじゃないですか。まだ人のことをどうだこうだなんて、そんな余裕のあるようなことではダメです。

自分が本当になんかぶつつぶれて、そして本当にこの闇の中に光が来た。

「もう私の中に、キャンドル・サービスどころのさわぎではない、本当にキリスト



の光が来たから、私には陰がありませんよ」と、皆さん一人びとりが言える。自分の陰がみんな消えてしまった。人には陰が見えるでしょう。キリストはそんな陰をご覧にならない。キリストは光だけを見てらっしゃる。

## ●キリストという光

この絶対恩寵の光の世界。これに向って、それだけの光を受けとらなかつたら、たまらない。せつかくこのキリストの、

「汝らは世の光なり」

「はい、そうです。あなたが本当に私の光ですから、私たち一人びとりは本当の灯火ともしびです。どんなに嵐があろうが、風が吹こうが、絶対に消えません」

と。力まないで、はっきり言えるわけです。キリストの光だもの。不滅の灯火だもの。キリストという光を受けとった、不滅の灯火を受けとった者は、これ不滅の光。黙示録にも書いてある。

「日月これを照らすを要せず。キリストがその光である」

と。これは黙示録どころじゃない。イザヤ書60章のそのすぐあとに出てくる。19節に、

「<sup>19</sup>昼は日ふたたびなんじの光とならず、月も輝きてなんじを照さず、エホバ永遠とこしえになんじの光となり、なんじの神はなんじの榮さかえとなり給わん。」(イザヤ60・19)

と。そうでしょ。これは我々にとつてはキリストですよ。キリストが私たちの光であるから、

「日月これを照らすを要せず」

という。

今のクリスチャンはなぜ、あんな一般にケチケチしているか。なぜ、

「自分の信仰」

だとか、

「自分の実存」

だとか、くだらないことを言っているか。

「イエス・キリスト、キリストの実存を見る。キリストの本体にぶつかれ。これを

受けとれ」

と。それを受けとることが聖霊を受けとることじゃないですか。聖霊の御霊のキリストを受けとらないで、何がキリスト教だというんだ。もう絶対にこれはダメです。もう非常にはっきりしている。

無教会が何と言おうが、私はびくともしない。人間小池はどんな野郎だっていいですよ。これに入ってくださいったこのキリストを、これは死に至るまで私は告白して進んでいく。



## ●内から発しているか

これが即ち、

「**起きよ、光を発て、なんじの光きたり、エホバの栄光なんじのうえに照出たればなり。**

ということ。

<sup>2</sup>視よ、くらきは地をおおい闇はもろもろの民をおおわん。

まさにそうです、今の世界は。

されどなんじのうえにはキリスト照り出たまいてその栄光なんじのうえに顕わるべし。

まさにこのクリスマスの預言みたいなものだ。

<sup>3</sup>もろもろの国はなんじの光にゆき、もろもろの王はてり出るなんじが光輝にゆかん。」(イザヤ60・1～3)

そのような預言がなされているのに、ユダヤ人はこのキリストを拒んだ。旧約聖書を聖書としていながら、ユダヤ教の連中はここにキリストを見ないというのは何ごとかと思う。イエスは、

「聖書(旧約聖書)は我につきて証しているのだ。お前たちはどこを読んでいるんだ」と、キリストは仰るわけです。

我々が叫ばなかったら、石が叫ぶ。もうこれからは、人数は要らんですよ。質的です。キリストの弟子も十二人いたけれども、結局、一、三人ではないですか、本当に立ち上がったのは。全世界の宗教、思想を向こうにまわして戦ったのはパウロ一人じゃないですか。

どうぞ、あなた方は、絶対無条件の世界に入ってください。自分の才能がどうだこうじゃない。このキリストを受けとって、そうしたらば、もう自分で実際驚くです。どうしてこんなことになっただろうと驚く。本当にうれしい。

だから、さつき読んでいただいたところにも、

「**懼るな、みよ、このたび一般に及ぶべき大いなる歡喜の福音を汝らに告ぐ**」(ル

カ2・10)

というの、

「大歡喜を福音する」

という表現です。こんなうれしいことはない。普通の人はずっと見て喜んでいて。我々は見て喜ばない。我々は、もし見るといふなら、我々の内に内観する。我々の中に臨んだときに初めて本当に歡喜がわく。御霊がきて、初めて本当の喜びがわく。魂の世界は正直だからね、そこにくるまでは本当の喜びにはならない。これを受けとっている人の言葉と、ただそれを見たり聞いたり読んだり研究したりして言っているような人たちの言葉とは違う。

「内から発しているか」



それとも、

「について語っているか」

これは全く次元が違うんです。

### ● 信入・貫入・祈入・突入

あなた方はもう、この武蔵野にきて、外から傍観しているようなことだつたら、そんなバカらしいことはないです。もう、あなた方はみんな内なる世界に突入して——さつきからしよつちゆう言っている「信入」ですね——信入、貫入、祈入、祈り入る。みんな中に自分を突入させて——捨身というのはみんな自分の身の中に捨てることですよ、外に捨てるのではないですよ、捨身の体勢というのは。キリストの中に捨てていくこの捨身の体勢が最高の体勢なんです。

このイザヤ書60章というのは素晴らしいところですが、19節にあるように、もう相対的な光ではない。キリストという光。

「世界がどんなに闇になつてみる。わがうちなるこの光の世界を何もものが侵すことができるか」

と。それだけの信の世界に、それだけの光の世界に、光に浸透されている世界に我々が入らなかつたらば、これからもちませんですよ、正直。物がなくなつたつていいよ。握り飯と塩と沢庵とお味噌と豆腐で生きられる。昔の坊さんはそれで長生きしたんだ、ちゃんとあとは祈りです。祈りが本当に味をつけてくれる。

「枯木龍吟」というけれども、本当に肝心な自然と一つになつている肉体。それから実に、キリストの霊の世界に本当に溶け込んでいる霊。それが本当に健全な人です。これは永遠の生命を持っている人です。いいですね。

### ● 阿房宮賦

そうでなければ、どの国も滅びるです、世界は。私はこないだだいぶ漢詩を読んでいたから、こういう不思議な詩にぶつかった。阿房宮あほうきゆうというのがある。これは大変な宮殿です。秦の始皇帝が何十年もかかって造つた昔の大宮殿ですよ。そして、大変な栄耀栄華をきわめたわけです。それが亡びへの道になるわけですが。始皇帝は、韓と魏と趙と燕と斉と楚の六国りっごくを全部征服して、大統一国家をつくつた。これはシナの全盛時代ですね。ちようどローマみたいですよ。この「阿房宮の賦あほうきゆうふ」というのを杜牧とぼく(803～852)という人が書いています。まあなかなか難しい句ですが、栄耀栄華のことを歌っているところは大変な文句があるんですけれども、そんなことはやめて、終りの方にこういう言葉がある。あほう宮もついに灰塵に帰してしまつたからね。

「嗚呼、六國りっごくを滅す者は、六國也、秦しんに非ざる也。秦を族しん(一族皆殺し)する者は、秦也、



天下に非ざる也。嗟夫、使し六國各おの其の人を愛せば、則ち以て秦を拒ぐに足らん。秦復た六國之人を愛せば、則ち三世より遞いにして萬世に至りて君為る可し、誰か得て族滅せんや。秦人は自ら哀しむに暇あらずして、後の人、之を哀しむ。後の人之を哀しみて、之に鑑ざれば、亦た後の人をして復た後の人を哀しましめん。」

(ああ、六國(中国戦国時代末期の齊、楚、燕、韓、魏、趙の六國)を滅す者は、六國であつて、秦ではない。秦を族(一族皆殺し)する者は、秦であつて、天下の人民では無い。ああ、もし六國おのおのその民を愛せば、すなわち以て秦をふせぐに足りたろうに。秦はまた六國の民を愛せば、則ち三世より遞いにして萬世に至つて君主だつたろう、誰かへて族滅したろうか。秦の人は自ら哀しむにいとまがなく、後の人、これを哀しむ。後の人これを哀しんで、これに鑑みなければ、また後の人をしてまた後の人を哀しませるだろう。)

という言葉がある。要するに、この秦に六國が亡ぼされたけれども、この六國を亡ぼしたものは六國自身であつて秦ではない。秦がいくら強大であつても、秦が亡ぼしたのではない。六國が自ら本当に自覚して、国をよく治め、民を愛すれば、彼らは力を合わせれば、決して秦に負けるわけではなかった。ところが今度は、秦を亡ぼすものは、天下ではなく、秦自身であるという。

要するに、ローマが亡びたのはローマ自身である。アッシリヤにしる、バビロニアにしる、北イスラエルにしる、南ユダにしる、全部これは自分自身が自分を亡ぼしている。ただ、それを撃つたものは神さまの手先になっているのにすぎないのであつて、亡びの原因は自分自身にある。

### ●日本の闇

日本がもし亡びるなら、日本人の魂の亡びにある。どれもそうです。今、中国がなかなか恐ろしい。それは彼らは今本当に自覚して進んでいるからでしょう。

しかしながら、本当に国が、民族が立つならば、これはやはり神・仏を敬するするような、そういった民族です。イスラエル人が、とにかくあの頑なな民族だけでも、とにかく亡びないできているのはやはり、聖書一貫つらぬいているところがあるからでしょう。

残念ながら、日本にはそれが無い。道徳もなければ、宗教もなければ。なんと情けない国だ。教育者も哲学者も本当に憂国の預言者の人物がない。今一番、日本に欠けているのは人物です。本当の人物になるためには、絶対界をこの胸三寸の中に持っているような人物でなければダメなわけです。その点ではやはり、西郷南洲は本当の明治維新の第一級の人物です。いつも天を相手にしてた。

日本の闇。結局、日本自身が闇である。どうぞ、皆さんはこの中であつて、今はもはやいじりごとの研究なんかしているときではない。研究というなら、本当に実存的な研究を



するしか道がないわけですが、とにかく挺身する。身を挺して、そしてこの神の国の建設のために、申し上げているとおり、捨て石となること。

その十字架道に本当の栄光があることが、パウロがローマ書8章で言っているとおり、  
「今の時の苦しみは、来らんとする栄光に比ぶべくもあらず。」

と。なにしろ、あの当時のヨーロッパに、それから今日に至るまで、神の子キリストをぬきにしては、パウロだけの人物はいない。パウロという人物はどうしてできたかというところ、キリストを本当に受けとったから、できた。自分が持っていたものはみんな塵芥の如くに捨ててしまった。

もう、あなた方は、20代の君たちはもう勃勃たるアンビション、本当の聖なるアンビションに燃えてきたと思う。私もあなた方の時代に早くそういうところに入りたかったよね。今はもう70になる。すこし遅まきだけでも、永遠の青年として進んで行きます。

ノストラダムスによると、1999年7月に世界は滅びるそうだ。それは決してただ笑い事ではなからうと思う。あるひとつの妙な霊的必然性が働いているようです。もし、悔い改めれば、大丈夫ですよ。悔い改めれば、その予言はあたらない。予言が当たらないことはむしろノストラダムスが喜ぶのであって、

「私の予言がついに当たった」

なんていうと彼は悲しむわけだ。今、霊界のどこかに居るだろうと思う。まあ日本人はやつと気がついて、ベストセラーになったけれども、ベストセラーだけでもってただウカウカしたってしょうがない。これを本当にひとつの警鐘として、警告の鐘の音として自覚しなければいかんわけです。

もう近い将来にこの東京はどうかなるかも知らんよ。私はとにかく『無者キリスト』（小池辰雄著作集第1巻 1975年刊）を書いたら、一緒に倒れてもいいよ。まあ、あなた方はせつせつとどこかへ逃げてください（笑）。それは逃げるのは、より長く生きて、この聖名のために働かんがためであって、命ながえるために逃げるのではない。

### ●一粒の麦死なば

しかし、さっきお話しした塩狩峠でもって逆行していく列車の前から飛び下りて、列車をレールの上でくい止めた。命を捨てて。

「二粒の麦死なば、多くの実を結ぶべし」

と。やはり、一人の死がたくさんの人を奮い起こして回心させる。

私にとっては、この兄貴がなんといっても本当に魂の恩人なんです。この兄貴は27歳で仆れるには惜しかった。いろんな意味で非常に優秀な兄貴だったですから。これが仆れました。本当はロンドンに行くはずだった。ロンドンに行けば、そういうことはなかった。それが北京に行かされて、ついに北京で仆れた。それで私が目が覚めたというわけです。



だから、私は兄貴のためにも絶対に犬死にするわけにいかん。

皆さんは本当に、この福音を受けとつて、行きどころがないじゃないですか。

「行きどころがない」

とは、なにもこの場所を言っているのではない。この使徒的信仰の中に入って、何と交換することができるとしようか。御霊が入ってしまったら、もうこれは御霊の光。

「汝らは世の光なり」

と。もうはつきりとキリストを私たちは受け取りました。このクリスマスは、とにかく私たちはもう毎回、非連続の連続でただ前進あるのみ。

「いっしょに」

なんていうところはないですから。質的には限りなく。そして、天界の使徒たちが驚くようなことが、あなたの方の中からやがて現象するでしょう。決して、小成に安んではいかん。そういう光です。この御霊はまさに光であり、同時に愛である。力である。この力と愛と光と、これは離すことができない。本当の愛は力を持っている。本当の愛は光を持っている。お釈迦さんでもキリストでも後光が射している。そして、悪魔、サタンをやっつける力を持っている。困っている人たちをどしどし助けていく。ペテロも、

「私は何も持っていないが、わがうちにあるキリストの名、これは力だ」

と、跛者を立たしてしまった。あのまず、躓いたり転んだりしていたペテロがですよ、御霊がきたら、あのようなことになった。楽しくてしょうがない。

どうぞ、皆さんは本当に祈ってくださいよ。祈り入ってくださいよ。何かお願いするのはない。祈り入って、自分をキリストと、即の世界に入れること。

無教会はこれを非常に警戒するんです。それを「神秘」と言つてね。そして、

「十字架の贖罪」

という命題を一生懸命に信じこんでいる。ダメだよ、それは。わるくはないけれども。観念だよ。そして、なるほど道徳的には立派でしょう。けれども、人を審く。なにも無教会の悪口を言おうとして言っているのではない。たとえば、そんなようなことだと言っている。

我々はこのキリストの光をいただいて、

「曲がったものは直くしていく」

という、イザヤ書にも書いてあるとおり。第二イザヤ書40章からあとを時々、朗々と読んでごらん下さい。読んでいるうちに祈りになってしまふから。

「本ものの世界に入らなければ、私は生きていられないぞ」

という魂にならなければダメですよ、いい加減なことでお茶をにごしているようでは。

お茶は日本のお茶が一番いいよね。それを濁したりしてはいかん。コーヒーや紅茶よりもよほど緑茶の方がいい。日本人というのは本来、自然をそのままに受けとるようできて



いる。大事な素質があったのに、なぜ、みんな人工的なもので崩していくかというわけだ。もう一辺本当の意味において、この日本的なものを再認識して、そいつを更に福音で伸ばしていかなくてはね。

### ●キリストの中に祈り入る

ルカ伝2章10節。羊飼いたちは、夜、光が出てきて、本当にびっくりしてしまった。そしたら、天界から天使の声がかきて、

「<sup>10</sup>御使かれらに言う『懼るな、視よ、この民、一般に及ぶべき、大なる歡喜の音信を我なんじらに告ぐ、<sup>11</sup>今日ダビデの町にて汝らの為に救主すくいぬしうまれ給えり、これ主キリストなり。<sup>12</sup>なんじら布にて包まれ、馬槽に臥しおる嬰兒みどりごを見ん、はその微しるしなり』<sup>13</sup>忽たちまちあまたの天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う、<sup>14</sup>『いと高き所には栄光、神にあれ、地には平和、主の悦び給う人にあれ』』(ルカ2・10～14)

「恐れるな。大いなる大歡喜の音信だぞ」

と。

「天の軍勢、御使に加わり、神を讚美して言う。いと高きところには栄光、神に現れたり。地には平安、主の喜びたもう人にきたれり」

と。まず現在完了のことを言っ、それから未来への祈りがそこに派生してくる。福音の世界はいつも現実ですから。間違えては困る。あの訳はみんな間違いだ。主がやってきたのに、「平和」ではない、これは「平安」です。本当の平安は力のある世界ですから。やってきたのだぞと。主の喜びたもう人は、あのキリストが平伏したように、平伏しの魂を喜びたもう。

そういうようなことが現れて、羊飼いたちは本当に驚いたわけだが、私たちはこのルカ伝の1節は本当に何ともいえない1節だと思う。

もうこの光は、私の中で、あなた方の中で消えませぬ。常に新たにキリストの中に祈り入る。太陽はいくら雲で遮さかられても、キリストの光は絶対に遮られない。もはや影なきもの、光そのものとなる。

あの曠愛新書にも書いたでしょ。法然が何とかして煩惱を去ろうと思うけれども、苦しくてどうにもならんと。それで、南無阿弥陀仏になっただけでも。私たちの中に煩惱があろうがなかろうが、本当に内側からこの光がともれば、全部これが変質変貌へんしつへんぼうさせていく。受けとっている者は、自己本位になるからいかん。キリスト中心になって、内側が御霊中心になっていけば、これがグングンと展開していく。無一物無尽蔵みづからみづからとはそのことです。

それで、私たちはただその世界に祈り入っていきます。

